

## 《WE 認証者インタビュー》

### WE 認証は工事監理者にとって役立つ資格

——ゼネコン、ファブとの意思疎通に有効——

「例えば現場溶接の際、一定以上の風速がある環境下において、工事監理者は溶接に待ったをかける知識が求められる。日本溶接協会が認証する溶接管理技術者（WE）資格は、施工要領書をチェックするうえで、ほぼマストに近い資格だと思う」とは、WE 特別級を保有する株式会社三菱地所設計（東京・千代田区）の北島宏治氏（50）。鉄骨に限らず、ゼネコンが担当する金属工事はサッシのスチール・アルミ、屋根のアルミ笠木カバー、オブジェの鋳物などがあり、溶接の適用は広範に及ぶことから「工事監理者にとって WE 資格はとても有効だと思う」と話す。

株式会社三菱地所設計  
工務部副部長

北島 宏治 氏



#### ●取得を契機に視野が広がる

同社の歴史は 1890 年、東京・丸の内を近代日本のビジネスの中心地として整備するため三菱社によって設立された「丸ノ内建築所」に始まる。その後、三菱地所株式会社の設計組織を経て 2001 年に分社独立した。

同社工務部副部長の北島氏は工事監理を担当する。「着工から竣工に至るまで、ゼネコンの施工内容をチェックする立場であり、大型ビルにおいて鉄骨工事の工事監理業務は責任範囲として大きなウエイトを占めている」。現在は東京・千代田区で進む「(仮称) 丸の内 3-2 計画新築工事」の総括監理所長として、工事監理の総責任者を務める。

建築分野を志すきっかけは高校時代に遡る。

「早稲田大学の建築学科を志望する友人の誘いを受け、週 1 回、共にデッサンを勉強することになった。その友人は途中で別の進路を選択し、デッサンを続けた私はそのまま受験して合格した」

1991 年 3 月、早稲田大学大学院理工学研究科を卒業後、個人助手として大学に残ることになった。

「大学時代の教授から校舎（早稲田大学理工学総合センター・研究棟 [55 号館]）を建てるので手伝ってほしいとのお話をいただいて、設計のお手伝いをはじめ、大学院卒業後はそのまま当該物件の工事監理に携わった。もともと意匠設計を志望して入学したのだが、2年間現場で工事監理を経験したことが、その後も、工事監理を志す契機となった」

1993 年三菱地所株式会社入社、工務部配属。WE 認証に関しては 1995 年の 1 級を皮切りに、1999 年特別級、2002 年に国際溶接学会（IIW）の国際溶接エンジニア（IWE）を相次いで取得した。

「建築の学生時代に、授業で鉄骨の溶接に関して多少教わる機会があったものの、実際の実務では冶金の世界に偏る傾向があり、知識が追いつかないケースも多々あった。それを補う方策の一つが日本溶接協会の WE 認証であり、取得をすることで工事監理業務の役に立つことが多くて助かった」。

北島氏は 1 級取得に至る背景をこう振り返る。

「溶接に関する知識を深めたいと考えていたところ、ある検査会社が企画した社員向けの WE 認証取得のための研修会の案内をいただき、一緒に受講する機会を得た。6 日間の研修に同席し、金属の世界はこれほど広いものかと認識すると同時に、そこで学べた貴重な機会を生かす意味でも 1 級を受験することにした」

## ●経験重ね、鉄骨の面白さ実感

工事監理の経験を重ねる過程で鉄骨工事に関する造詣も深まっていく。

「印象に残る物件は、2000 年に竣工した山王パークタワー（東京・千代田区）。多士済済が集う鉄骨定例会議に出席する機会を得て、鉄骨の世界の深さ、そして論理的に明快な答えが出る鉄骨の面白さを実感した」



北島氏が現在、総括監理所長を務める「(仮称)丸の内 3—2 計画新築工事」外観パース（2018 年 10 月竣工予定）

特別級取得後は周囲の目の変化を感じ取るようになり「その資格の重さゆえに、仕事にはきちんと取り組まなければならないと常に意識するようになった。また、IWE 取得に際して、さまざまな業種の方々と交流できたことは非常に刺激的であったし、視野が大きく広がったと感じている」

現在、総括監理所長を務める「(仮称)丸の内 3—2 計画新築工事」は 2018 年 10 月の竣工を予定する。工事監理者の担う役割については「現場の動きを読み、起こり得るリスクを回避するための即断即決の指示が肝要であり、将棋と同様、先を読む能力が求められる」と指摘する。

同社では現在、7 人（特別級 2 人、1 級 4 人、2 級 1 人）が WE 認証を取得している。北島氏は最初の取得者として「WE 認証に関する社内の認知度は徐々に高まりつつある。若手にとってはまず一級建築士という大きな目標があり、取得した年齢になるころには日常業務に追

われて勉強する時間がなかなか取れなくなるため、WE 認証取得に向けたハードルが上がっていることは事実である。ただ、これまでもぜひ取得した方がいいと社内で地道に勧めてきた経緯があり、取得者からは共通して勉強になったという感想を聞く。工事監理を担当する者にとっては資格取得に至る過程で必要な知識が得られるだけでなく、ゼネコンやファブリーケーターと意思の疎通を図ることができるようになる資格だと思う。意思の疎通が円滑にできる現場は施工上のトラブルがほとんどない」と話した。

(2017年2月7日取材)